

アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所 羅田 享

今回扱うアニメ作品：君に届け

今回のテーマ

恋愛について考える

I. 恋愛は転移からはじまる

II. 恋愛は人との距離を縮めること

III. 恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

I. 恋愛は転移からはじまる

転移とは？ 出会いは転移から

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライアントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

具体的には以下のような現象として現れる

① 過去の感情の再現

- 例えば、厳格な父親に対する感情を、現在の上司に対して無意識に向けてしまう

② 行動パターンの反復

- 子供時代に形成された対人関係のパターンを、現在の間人関係でも繰り返してしまう

転移には主に2つのタイプがある

- 陽性転移：好意的な感情や期待を投影する
- 陰性転移：否定的な感情や不信感を投影する

転移は病的な現象ではなく、むしろ人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じていると考えられている。

とりわけ情緒的に不安定な時期に受容されることで、過去の重要な対象との関係性が転移として再現されやすくなる。「君に届け」では、この転移関係の形成が主人公たちの出会いの時点から見られる。風早くんは入学式で道に迷っていた時に優しく道案内をしてくれた爽子に対して陽性転移を抱き始める。一方の爽子は、クラスの雑用を自ら推薦してやろうとした際、風早くんが彼女の日常的な貢献を理解し見守ってくれたことを知り、彼への陽性転移を形成していく。このように、互いへの理解と受容を通じて、両者の間に転移関係が深まっていったと考えられる。

陽性転移が起きる中で、爽子は、風早くん近づきたい一方で、風早君を理想化する中で他者との関わりを持とうとし始める。理想化し、自分も風早くんのようになりたいという思いもあったように感じられる。

そして爽子は同じクラスの子達（矢野あやねと吉田千鶴）と交流を持ち始めていく。

（肝試しで爽子がお化け役をやることをめぐる話題をしていたシーン）

わかってもらえた……！！ 私の気持ち

ほんの少しだけど かわれた気がする 風早くんのおかげだよ

このように風早くんが爽子にとっての良い対象となり、これまで内向的で壁を作ってきた爽子が周囲の世界に関わろうとするきっかけを作り出している。それは風早くんという存在（これは実際の風早くんではなく爽子の心のなかで抱く風早くん像であり、彼女の内的対象）が爽子にとって心の支えになっている。つまり彼女にとって風早くんは良い対象となり外界に触れていくきっかけを作り出している。

II. 恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。しかしその関係が成立するかどうかは相手の思惑も関係する。相手が自分をどのように感じているのか、手探りで確かめていく作業が必要であり、なかなか確証が得られるものではない。それ故に、相手の一挙手一投足に一喜一憂し、心が揺さぶられる。

「君に届け」の主人公の黒沼爽子は風早くんと恋仲になる前に、彼女は容姿から同級生に「貞子」と間違えられ、彼女自身も心の壁を作っていた様と感じられる。その彼女が風早くんとの出会いで心がどのように揺れ動いていくのかみていく。

1. 風早くんとの出会い

1) 肝だめしでの風早くんとの関わり

肝だめしで風早くんと爽子がふたりきりになり、言葉を交わしたのちにお互い沈黙になった時に爽子が感じた気持ち

急に 喋らなくなるから どうしていいのかわからない もうわからない

...ところが めちゃくちゃになりそう

まるで生まれかわったみたいに 初めての気持ちばかり

...風早くんは 私に はじめてを たくさん くれるみたい

爽子は風早くんと二人きりになる中で、陽性感情（好き、喜び、感謝など）を抱いたが、この感情をどのように扱っていいか分からず、またその感情を自分が抱いていることに戸惑いを感じている。

→肝だめしの結果発表で風早くんと爽子の間柄をクラスの皆から冷やかされてしまう。

2) 風早くんとの関係を周りから囃し立てられることでの葛藤

.....私 誤解の解き方...しってる 風早くんが 教えて くれたから
間違って なかったはず
きっと 誤解はとけたはず
嘘はひとつも なかったもの
本当のことを 言ったんだもの
きっと 風早くんの名誉は守れたはず

クラス中に恋仲を冷やかされたとき、その噂に怒りや羞恥心や様々な情緒を抱き、傷つき、これまでの関係性を失うことを恐れ、否定し、往々にして相手を傷つけてしまうことに陥りがちである。(cf.「あの花」の幼少期のじんたん)しかしこの場面で風早くんは爽子を守り、クラスの仲間たちを非難する。爽子はクラスの人達に怒りや羞恥心や様々な情緒を感じていたと同時に自分を守ってくれた風早くんにも感謝の思いもあったように感じられる。しかし今の爽子には風早くんに近づくことはできず、自らの身を引くことで事態を収め、自身の色々沸き起こる感情も抑えようとしたと考えられる。

しかしそれは、自己愛的な殻に退避することであり、一度は近づいた風早くんとの関係性を壊してしまうことである。

それは風早くんとはもう以前の様な関係には戻れないことであり、爽子はさみしく感じる。そのなかで爽子は今までの傷つかないように距離を取るという、これまでとってきた防衛の仕方は、変えたいと感じ始めている。これはこれまで自身が採ってきた「傷つかないように距離を置く」という防衛的な対処方法に限界を感じ始めており、新たな関係性の構築に向けた内的な変化の兆しが見られる。

この心理的な変容過程は、青年期における対人関係の成熟過程を象徴的に表現していると考えられる。

3) 風早くんとの再会

以前の関係には戻れないと感じていた爽子は、登校時に風早くんと出会う。そこでクラスメートと風早くんからの謝罪の品を受け取った爽子は、感極まって涙を流す。しかし、この場面での二人の対話には不自然な隔たりが存在している。風早くんが爽子との距離を縮めようと努めているのに対し、爽子は彼の真意を理解しようとせず、自己防衛的な態度を取り続けている。この反応の背景には、爽子が自身を風早くんと対等な存在とは認識できず、彼を手の届かない憧れの対象として位置づけているという心理的な構図が見て取れる。

タイトルである「君に届け」という願いを実現するためには、爽子が自己防衛的な殻を破り、周囲との関係性を深めていくことが不可欠となる。特に風早くんとの心理的距離を縮めていく必要性が示唆されている。注目すべきは、爽子自身もこの時点で、風早くんをはじめとする他者との関係性を発展させたいという意識が芽生え始めていることである。この変化は、風早くんが彼女の存在を無条件に受容してくれているという実感に支えられていると考えられる。

2. 矢野あやねと吉田千鶴との友情

プロローグで爽子は風早くんとの距離感で揺れ動きながらも、徐々に関わられる様になり、

まだ自分の思いが風早くんに届いていないと感じている。しかし一方で、風早くんが爽子にとって憧れの存在になり、彼女の心の中の良い対象となっている。そんな良い対象に支えられながら爽子は外的世界に触れていき、矢野や吉田と友人になり、そのことをきっかけにクラスの子達とも仲良くなっていく。しかしそこは一筋縄にはいかず、思春期ならではの葛藤や悩みを抱えながら、様々な困難に直面していく。

ここで再び Adolescence Process を取り上げる。

1) Adolescence Process に関して

二次性徴に前後して自分自身の心身に大変動が生じる。

潜伏期に一旦は収まっていたエディプス葛藤が再び起き、自身のこれまでのアイデンティティが揺らぎ、今までの社会的、家庭的秩序を揺さぶっていく。

潜伏期をひっくり返して、それまで慣れ親しんできた生き方を試される重要な時期。その中で誰もが喪失的感情を抱く（だからこそ第二の分離個体化）。

この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方をする傾向にあると言われている（妄想分裂ポジション）。物事は正しいか間違っているか、素晴らしいかひどいかのどちらかであり、中間にはあまり余地がない。この段階では、若者が自己中心的で、自分自身を中心に考えるのは普通のことであり、この一環として、この年代の人々は、自分の外見について自意識過剰になり、常に仲間から判断されているように感じてしまう。

Adolescence Process の中で爽子の心は揺れ動き、周囲に対して非常に迫害的に捉えながらも一旦親しくなると、その相手（対象）を理想化とも思えるほど「夢のよう」と良い対象と捉えている。その中で爽子の心は混乱し、再び退避をしながらも風早くんに支えられながら人との距離を縮めていく。

2) 席替えにまつわる葛藤

先ほど、この年代の人々は具体的で白か黒かの考え方に陥りがちであると述べたが、爽子は同年代の人々との距離を置き、自己愛的殻に閉じこもり、心の平静を装おうとしている。それは、無意識のうちに殻の外の周囲を「悪い対象」と捉え、常に迫害不安を抱えていると考えられる。そのため、爽子は自分の悪口に非常に敏感になっている。迫害感を抱えている時に実際に悪口を耳にすると、自己否定感がより強くなり、他者との距離をさらに取ろうとする。

しかし、爽子は風早くんという「良い対象」に支えられていると感じており、それ故に迫害感を抱えながらも徐々に周囲の人たちと関わりを持つようとしていく。

その一端が示された例が席替えをめぐるシーンである。

・その前に数学のクラス替えのときのやりとりから

A「あーそういや この席って 普段 誰なの？」

B「貞子だよ」

A「えっ貞子……座ったらたたられるって聞いたよ！」

そこで爽子が彼女らに勇気を振り絞って言う

爽子「あもう……大丈夫だよ 汚くないし…す、座っても 何も起こらないよ」

「私 そんな力ないよ！ 私…靈感とかもないから……」

爽子は心の中で 言った 言った 言ったよ！と呟き、鼓舞する。

しかし何も反応なく彼女らは、その場を立ち去っている。

【考察】

爽子が常に抱えている迫害感が、実際に聞こえてくるほど強くなっている。そして爽子は言った子たちに対して果敢にも関わっていかうとする。一般的に不登校になってしまう子たちは、このような出来事に非常に傷つき、より周囲に対して迫害的恐怖感を抱き、クラスに入ることができなくなり、不登校に陥ってしまう。以前の爽子であれば、そこまで

恐怖を感じることはなくとも、じっと耐えて殻に閉じこもっていただろう。

しかしこのシーンでは、爽子は彼女たちに対して果敢に関わろうとする。それは、風早くんが爽子の心の中の良い対象となったことが大きい。(彼に支えられ、受け止められていると感じているのだろう。)
「言った 言った 言ったよ！」という彼女のつぶやきは、自身の心の風早くんに言っているようである。

そして席替えのとき

爽子は周囲の視線が気になる。周囲は「貞子」の近くの席にならないことを強く感じている様である。そして爽子の耳にその様な言葉が実際に聞こえて来て、爽子は傷ついてしまう。そして爽子は思う。

いつか 「この席になれて嬉しい」って 誰かと 言えたらな……

→そこで風早くんが自ら爽子の隣の席を希望し、そして矢野あやねと吉田千鶴も近くに着く。

そのことに帰り際、一人感激する爽子。そこに風早くんが爽やかに声をかける

そして爽子は思う

……一体 いつからだったのかな……

憧れも尊敬も それは今でもかわらない。――だけど…憧れも 尊敬も飛び越えて

生まれてしまった もっともっと大きな 大すきな気持ちは

→徐々に距離が近づく中で、爽子は風早くんに惹かれていくのを感じる。それは、爽子自身が主体的に他者と深く関わりたいという萌芽的な段階になっているとも考えられる。

そして、爽子の作った講義ノートが好評であったことから徐々にクラスの人たちからも受け入れられていく。

→しかし瑣末な噂が広がっていき、爽子と周囲の人たちへの溝が生じていく。

3) 噂、いき違いからの誤解

風早くんと距離も近くなり、矢野やちづとも交友関係が形成されそうな時に、彼女らの関係性を壊す様な噂話（吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴している）が広がり、そのことに加え、些細ないき違いから、彼女らとの関係がギクシャクしていく。その中で爽子はトイレで噂を聞く。

それは「貞子（爽子）が吉田と矢野をバックにつけて、風早くんをいいように使っている」という、ありもしない噂であり、それで「貞子につきまとわれてたら 株を落とす」という話を聞き、爽子は自分が本当は矢野や吉田とを傷つけており、いつか風早くんも傷つけてしまうのではないかと、自分が周りにいると迷惑になる、離れた方がいいと考え、彼女ならびに風早くんからも再び距離を取ろうとする。

【考察】

元々殻に閉じこもりやすい爽子は、風早くんを始め、矢野や吉田、そしてクラスの人たちからも受け入れられていき、自分の思いが叶いつつある中で、強い喜びを感じていたと思われる。しかし、その距離が続くなかで、爽子は自分が本当に彼らに受け止めてもらえている存在なのか、という疑念を抱き始めたと考えられる。確固とした関係性が築かれていないため、噂話（ある意味、自身が周囲をかき乱しているという内的空想の投影でもある）や些細ないき違いから、対象（風早くんたち）を傷つけてしまったのではないかと、罪責感に苛まれたと考えられる。爽子は彼らとの距離感が不安定に感じられ、今の関係性が怖くなり、自身が傷つくことを恐れ、反動で再び距離を取ろうとしている。

そして対象関係論の理論で考えたとき、爽子の心は迫害不安と抑うつ不安が混在しているようにも感じられる。詳細にいうと、自己愛的殻に閉じこもり、妄想分裂ポジションの状況であった爽子が風早くんに母の様に抱えられる中で（なにかここいらが「竜とそばかすの姫」を想起させられる。）、徐々に妄想分裂ポジションの迫害不安から抑うつ不安に変

わっていく中（抑うつポジションへの過渡期）で、再び退行（退避）しようとしているとも捉えられる。

cf：PS ポジション 迫害不安→PS ポジション 抑うつ不安→D ポジション

しかし風早くんへの思いも強く、爽子はその自身が抱く思いをあらがいたい思いも強く出ている。

印象的なシーン

風早くんが黒沼の様子がおかしいといい、声かけたときに爽子は咄嗟に避けてしまい、風早くんが「...なんで...さけんの？」と言った後の爽子の思いが述べられる。

なにがあっても 風早くんは ずっとさけないで いて くれたのに
私が周りにいると 迷惑になる 離れた方がいい

（一方で）

さげたくない でも そばにいたい

さける事は正しいの？間違ってるの？ わかんないよ わかんない

（2巻 位置81～84）

その揺れ動く葛藤のなかで苦しむ爽子に風早くんは声をかける

風早「.....やっぱ 納得いかないんだけど 嫌いじゃないなら なんで さけんの？」

爽子「.....「私と」「喋らないで」ってやっぱり言えません」泣き出す爽子

爽子「やっぱり 思ってもいない事はいえないよ～

風早「えっ！！ 何!？」

爽子「株が落ちたらごめんなさ～～い なんでもいいからそばにいたいよ～～」

風早「待っ...黒沼! 」強い口調で「ちゃんと喋ってくんなきゃ わかんない」

爽子「.....私が周りにいると株が落ちるって.....」

風早「株！？ 誰が言った！？」

爽子「う...噂で...」

風早「噂！？」

風早「株とか噂とか そこに俺の意志はどこにもないじゃん！ それは黒沼の決める事ではない 俺が決めることだ！」

風早「俺は.....俺のしたい様にするよ 黒沼と喋りたければ喋るし 喋りたくなかったらこんな風に喋っていない！ ...噂なんてどーだっていい。俺にとっては俺を見てる黒沼だけが黒沼だ！！」

そこで爽子は思う

...私が周りにいたら みんなが迷惑すると思った。

だけど それでも私は求めていたの 矢野さんや吉田さんや風早くんのような存在を--ずっと 憧れていたの

大事に思う気持ち 大事にされる気持ちを

→風早くんを抱えられる中で、距離をとり、退避しようという思いよりも、彼とそして矢野や吉田と距離を近づけ、仲良くなりたいという思いが勝る様になっている。そこで爽子は現実に向き合おうという思いが強くなり、噂に対峙していく